

PIにおける「ワールド・カフェ」方式の適用可能性に関する考察

畑中 謙吾¹・森田 康夫²

¹正会員 エヌエス環境株式会社（〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-9）

E-mail:hatanaka-k@ns-kankyo.co.jp

（前 国土技術政策総合研究所）

²正会員 国土技術政策総合研究所（〒305-0804 茨城県つくば市旭1番地）

E-mail: morita-y92tc@nilim.go.jp

PI実施時の課題の一つに、「参加者の発言量の偏りをいかにしてなくし、参加者全員が十分に意見を表明できる場を構築するか」ということが挙げられる。

そのような状況の改善するための一つの方法として、近年開発された会議の進行方法のひとつである「ワールド・カフェ」方式のPIの場への導入を提案する。本方式は大人数の会議においても参加者全員が多くの「意見」や「物語」を表明しやすい工夫がなされており、参加者の良好なコミュニケーション促進及び十分な意見収集が期待できる。

本論文では、ワールド・カフェの紹介を行うと同時に、日本の自治体でワールド・カフェが導入された事例のヒアリング調査から、PIや合意形成の場におけるワールド・カフェ導入時の特徴及び課題を把握し、考察を行なう。

Key Words: ワールド・カフェ, PI, 合意形成

1. はじめに

近年の公共事業は「市民との合意形成を大事にする」という方向性のもとでPIの導入が進められており、導入以前と比較してより円滑な合意形成が行なわれるようになりつつある。

しかし、その一方で、PIの実施に関する問題点についても多々指摘されている。

その問題点の一つに「参加者の発言量の偏り」が挙げられる。声の大きい人や大人数の場で物怖じしないで発言できる性格の人の発言量が多くなり、それらの一部の意見のみが話し合いの結果に反映されてしまうことが生じる危険性が指摘されている。

そのような状況の改善するための一つの方法として、PIの場に「ワールド・カフェ」方式の導入を提案する。

ワールド・カフェは、少人数グループを基本とした話し合い・会議進行の一方式であり、参加者全員がそれぞれの意見や「物語」を語りやすい工夫がなされており、上記の問題点を大幅に解消・改善できる可能性が高い。

本論文では、既存文献を中心としてワールド・カフェの特徴を把握するほか、日本の自治体でワ

ールド・カフェが導入された事例のヒアリング調査から、PIや合意形成の場におけるワールド・カフェ導入時の特徴及び課題について言及し、考察を行なう。

2. 「ワールド・カフェ」の概要及び特徴

(1) ワールド・カフェの標準的な実施の流れ

「ワールド・カフェ」は1995年1月にアニータ・ブラウンとデイビッド・アイザックスによって開発・提唱された、話し合い・会議進行の一方式である¹⁾。

参加人数は最低12名（それ以下であれば全体で話し合いを行うなどが効率的かつ合理的である）で、上限は会場設営が許すかぎり、特に決まった上限は存在しない。海外では1000名を超える規模でワールドカフェが実施された例もあるほか、後述するが日本でも500名で行われた事例がある。

名称の中に「カフェ」という言葉が入っているのは、ワールドカフェを行う際にはお茶等の飲み物やお菓子などが用意され、「カフェ」のようなリラックスした雰囲気の下に話し合いが行われることが由来である²⁾。

ワールドカフェは「参加者の自由な意見を出し合

い、聴きあう」、 「互いの思いや考えの背景を知ることにより参加者同士の相互理解を深める」という目的のために行うことが適切である。

図-1にワールド・カフェの標準的なプロセスを、図-2にワールド・カフェが行われている様子の写真を示す。

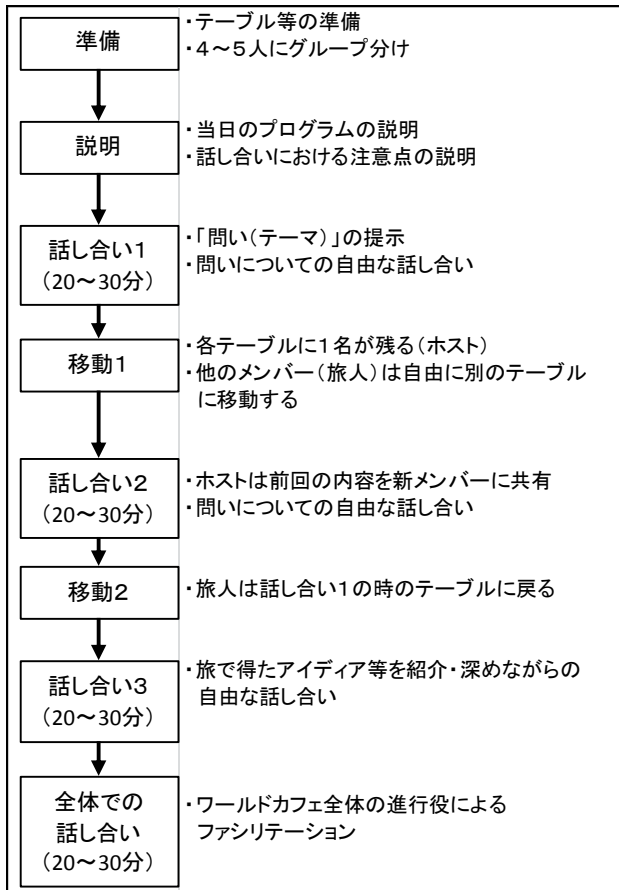


図-1 ワールドカフェの標準的な流れ



図-2 ワールドカフェの実施状況(「イマジン・ヨコハマ」で行われているワールドカフェの様相、横浜市HPより)

「準備」の段階では、参加者が収容できる会場の中に4～5名が囲んで座れるようなテーブルを参加人数に合わせて準備する。テーブルの上には大判の模造紙とペン(サインペン等)、トーキングオブジェクト(手で持てる位の大きさのものであれば何でもよく、例えば人形などを置く。そしてテーブル中央に置いてあるトーキングオブジェクトを発言したい人が手を伸ばして取り、持った人のみが発言するこ

とを許される。持っていない人は持っている人の話を割り込まずに聴く。話が終わったらトーキングオブジェクトを中央に戻す。また、会場の別テーブルに喫茶コーナーを設け、お茶・コーヒー・お菓子等をセルフサービスで提供する。オプションとして各テーブルの中央に花等を飾る工夫等もある。

来場した参加者を各テーブルに案内し、4～5名を1グループ(3人以下では多様性に欠け、6人以上ではメンバー間での発言時間にばらつきが出やすい)として着席して頂く。

「説明」では、当日行われるプログラムやワールド・カフェにおける話し合いでの注意点などをワールド・カフェ全体の進行役(ファシリテーター)が説明を行う。ワールド・カフェにおける話し合い時の主要な注意点について表-1に示す。

表-1 ワールド・カフェでの主要な注意点

<ul style="list-style-type: none"> ・一人が話し、残りの人は聴く ・相手の話をよく聴く ・相手の話を否定しないで受け止める ・リラックスし、対話を楽しむ

「説明」が終了すると「話し合い1」となるが、参加者同士の多くが初対面である場合には、本題に入る前に各グループで簡単に自己紹介の時間を設けることが一般的である。自己紹介は、メンバーを入れ替えて行われる「話し合い2」の本題前にも実施される場合もあり、それらの実施または不実施については、ファシリテーターがワールド・カフェ実施前にあらかじめ計画する。

「話し合い1」では、最初にファシリテーターより話し合いの「テーマ(問い)」が提示される。以下の話し合いではそのテーマについて自由に話し合いを行う。話し合い時では、必要があればトーキングオブジェクト等を使い、注意点で示された内容を各メンバーが心に留めつつ話し合いを行う。また、テーブルの上に用意された模造紙とペンは、話し合いの時に自由に何かを書き込みたいときに使用する。

「話し合い1」が終了すると、「移動1」となる。ここでは、まず各テーブルで話し合い、1名「ホスト」役を決める。ホスト以外のメンバー(「旅人」)は今のテーブルを離れて自由に移動し、移りたいテーブルの席に着席する。ホストはそのまま元の位置に着席する。

「話し合い2」では、最初にホストより「話し合い1」で行われた内容の要約を新メンバーに伝える。その後は「話し合い1」と同様に自由に話し合いを行う。

「移動2」では、ホストは移動せず、旅人は「話し合い1」のテーブルに戻る。

「話し合い3」では、ホストによる「話し合い2」で行われた内容の要約が最初に行われ、その後は自由に話し合いが行われる。

最後に「全体での話し合い」を行う。ワールドカフェ全体の進行役であるファシリテーターが中心となり、参加者全員でのまとめの話し合いを行う。各

グループで話し合われた内容を各グループから発表して頂くなどの方法により、行われた話し合いの内容を全員で共有する。

なお、この部分においても当日の話し合いの内容から「結論」を導かないことを前提にする。

(2) ワールド・カフェ実施方法のオプションの例

前節において標準的なワールド・カフェの実施方法を述べたが、参加人数、話し合いのテーマ、時間等により、実施方法を表-2に述べるような形などに変更しても構わない。逆に、どのように実施するかということを計画することがファシリテーターの腕の見せ所でもある。

表-2 ワールド・カフェ実施方法のオプション (例)

<ul style="list-style-type: none">・話し合い毎にテーマ(問い)を変える・話し合いの回数を4回あるいは2回にする・最後の話し合い時に旅人が最初のテーブルに戻らないで旅を続ける形式とする
--

(3) ワールド・カフェの特徴

ワールド・カフェの特徴は主として以下の4つである。

第1に「1人当たりの発言時間の長さ」が挙げられる。

話し合いにおけるグループ構成人数が少ないため、他の方法に比べて一人当たりの発言時間が十分に確保される。例えば、標準的なワールド・カフェでは、1回の話し合いの長さを20分とした場合、話し合いの主要部分は合計60分となる。このワールド・カフェが40名で行われた場合、一人当たりの発言時間は60分÷グループ人数(4名)となるので、平均15分である。一方、40名全員で話し合いを行った場合には一人当たりの発言時間は平均1.5分(60÷40)であり、10倍の差となる。ワールド・カフェでは自分の意見を表明する上で十分な長さの時間が確保出来る。

第2に「発言の容易さ」が挙げられる。グループの構成人数が少ないため、発言するときに発言者に大きな負担がかからずに発言することが出来る。そのため参加者全員からの自由な意見の聴取が可能となる。

第3に「参加者全体の意見の共有」が挙げられる。話し合い毎にメンバーを入れ替えることにより、直接同じメンバーにならなかった人の多くと間接的につながることになり、直接話をしていない多くの人も意見や知識の共有がなされたような感覚が得られる。従って、ワールド・カフェは多人数での全体会議を効率的に行う手法である。

第4に「参加者の自由な意見を出し合い、聴きあい、参加者同士の相互理解を深める」ことが挙げられる。互いの話を受け止めあうスタンスが参加者から広く意見を引き出すことに大きく寄与している。一方、その場合評価や批判は相容れないため、ワールド・カフェでは話し合った内容に関して結論を導

き出すことは難しい。ワールド・カフェで出された意見からある一定の結論を導き出すためには、意見集約のための話し合い等を別途設定して行う必要がある。

3. 「ワールド・カフェ」の導入事例

日本においても数年前からワールド・カフェを導入した話し合いが、企業内での会議や自治体等でさまざまな形で行われるようになってきている。

本論文では、自治体がワールド・カフェを導入した事例の中から、筆者がヒアリングを行うことが出来た2例について、その概要及び特徴を紹介する。

(1) 「イマジン・ヨコハマ」におけるワールド・カフェ導入事例

「イマジン・ヨコハマ」は、「開港150周年の節目に横浜の都市ブランドをみんなで創るプロジェクト」³⁾として2008年12月から2010年6月にかけて行われたプロジェクトである。実施主体は横浜市都市経営局政策課(現横浜市政策局政策課)である。

表-3にその概要を記す。

表-3 「イマジン・ヨコハマ」におけるワールド・カフェの実施概要

<ul style="list-style-type: none">●2009年5月9日(13:00~15:30) <p>ワールド・カフェ</p> <ul style="list-style-type: none">・参加:約500名・話し合いは3回・3回目の話し合いも新メンバーで行う・各回毎にテーマ(問い)を設定①「『ヨコハマ』の何がわたしたちをひきつけるのでしょうか？」②「50年後、大空からヨコハマを見ると、どんな人が、どんな表情で、なにをしていますか？」③「未来のヨコハマは、わたしたちに、どんな一歩を踏み出して欲しいと思っているのでしょうか？」 <ul style="list-style-type: none">●2009年3月28日 <p>キックオフ・ワークショップにおけるワールド・カフェ</p> <ul style="list-style-type: none">・参加:約200名・本番(5月9日)前の練習の意味合いも兼ねる(問いや形式は本番と同じ)

「イマジン・ヨコハマ」におけるワールド・カフェは、より多くの市民からより多くの意見を引き出す目的で企画され、実行された。なお、ワールド・カフェは単独で行われたのではなく、前後にオリエンテーション、「つながり市民インタビュー」、クロージング(一日のまとめ等)と共に実施されている。

また、当初は参加人数目標を1000人に設定しており、そのような大人数での話し合いが実際に可能であるかどうか実例が身近になかったこともあり、練習の意味合いを兼ねて本番である5月9日当日にワールド・カフェの進行のお手伝いをして頂くボランティアの方を中心としてワールド・カフェを行ってい

る。

本プロジェクトを担当した横浜市都市経営局政策課の担当者にヒアリングして得られた内容を表-4に記す。

表-4 「イマジン・ヨコハマ」におけるワールド・カフェ実行担当者へのヒアリング結果

- ・キックオフで事前に練習を行った事が良かった。ここで出来る手応えをつかめたので、本番は安心して行うことが出来た
- ・沢山の思いを出す手法としては、特に適していると感じた
- ・みんなと話したような気持ちになれる、連帯感が生まれる
- ・同じ立場で自由に話せることが良い
- ・お互いにぶつかり合い、評価、批判するのではないことが良い
- ・初対面同士の人が集まって話し合いがうまく進行するのか不安があったが、実際に行ってみるとスナリと進行した。あまり心配しなくてもよいのかもしれない
- ・最初のチェックインが大事
- ・ワールド・カフェにおける話し合いのルールの設定・認知が重要
- ・今後もイベントや自分の職場等の身近な所など、いろいろな場面で使っていきたい
- ・市の職員が別の部署で自主的に広がっている（例えば自分の業務の中で、福祉系など）
- ・ワールド・カフェの問題点や課題は特に見当たらなかった

(2) 国営昭和記念公園及び国営みちのく杜の湖畔公園におけるワールド・カフェ導入事例

国土交通省都市・地域整備局公園緑地・景観課が実施主体となり、平成21年度に行われた「都市からはじまる環境配慮社会の形成」調査業務の中で、多くの市民・利用者から環境に配慮した公園管理・運営の新しいアイデア・ヒントを得ることを目的として、国営昭和記念公園及び国営みちのく杜の湖畔公園の2つの国営公園でワールド・カフェが実施された。

本事例では、先の「イマジン・ヨコハマ」での事例とは違い、実施主体の担当者はワールド・カフェの話し合いの中や全体ファシリテーション等には加わらず、外側から進行状況を見守る形であった。

また、両公園での事例では、いずれもワールド・カフェの実施から約1ヶ月後に意見集約を目的とした会合が開催されている。その会合の参加者は、会合前に実施されたワールド・カフェ参加者の中から希望者を募る形で召集された。

国営昭和記念公園及び国営みちのく杜の湖畔公園におけるワールド・カフェの実施概要を表-5に、プロジェクト担当者へのヒアリングを行った結果を表-6に記す。

表-5 国営昭和記念公園及び国営みちのく杜の湖畔公園におけるワールド・カフェの実施概要

- 2010年1月10日(13:00~16:00)
国営昭和記念公園におけるワールド・カフェ
 - ・参加者:約100名
 - ・話し合いは3回
 - ・3回目の話し合いも新メンバーで行う
 - ・各回毎にテーマ(問い)を設定
 - ①この公園で、これまでどんな楽しみ方(体験や経験)をしてきましたか？」
 - ②「『地球に優しい』という視点から見て、この公園にどんな関わり方、楽しみ方をしていきたいですか？」
 - ③「『地球に優しい』という視点から、この公園で私にできることはなんですか？」
- 2010年1月16日(13:00~16:00)
国営みちのく杜の湖畔公園におけるワールド・カフェ
 - ・参加者:約50名
 - ・問いや形式等は国営昭和記念公園と同様

表-6 国営昭和記念公園及び国営みちのく杜の湖畔公園におけるワールド・カフェ実行担当者へのヒアリング結果

- ・告知期間が短かったことと実施が冬だったことで、思ったように人が集まらなかった
- ・公園とつながりの有るボランティア(公園に詳しい方)、コンサルの方が勉強がてらに参加したなど、当初狙っていた広く市民の参加を募るという部分で少し課題が残った
- ・会議室で備え付けの机をつかったこともあり、カフェの雰囲気あまり出せなかった(杜の湖畔公園)
- ・立場の違う方との話の方が楽しそうであった
- ・ファシリテーターの進め方によって雰囲気も変わるのではないかと感じた
- ・一般の会議とは違う、いろいろな意見が生まれた
- ・話す時間が短かいようだった(20分)
- ・意見は出やすいが、一方で意見の集約が難しい
- ・初対面でも自由に意見が出ていたようだ
- ・少し、長めに話す人が見受けられた、対応が課題
- ・現段階では広めるのは難しいように感じた(ファシリテーション、テーマ(問い)の設定、意見集約などにかなり高度な技術が必要ではないかと感じたため)

4. 考察

「イマジン・ヨコハマ」の事例は、ワールド・カフェがかなり成功した事例と言える。成功に至った理由としては、以下の二点が主要な要因ではないかと考える。

- 実施前にテストを兼ねてワールド・カフェを実行・体験してみた
- 自治体(横浜市)の担当部署の職員も話し合いの輪の中に入った

ワールド・カフェの成功には、事業実施主体側がその効果を信頼することが大きな要因であろう。また、ワールド・カフェの目的が相互理解にあるという点からも、当事者の一人である事業実施主体側から実際にワールド・カフェの話し合いの中に入ると

いうことは重要なポイントとなる。

一方、国営公園の事例では、事業実施主体側が話し合いの中に入らなかったため、参加者との信頼関係の構築や事業実施者側のワールド・カフェへの理解が深まらない形になってしまったのではないかと推測される。

ワールド・カフェのファシリテーションは、コーディネートとは違ってファシリテーターの中立性がさほど必要ではないため、理論的には事業実施主体側が担当しても問題は生じない。しかし、ファシリテーションの負担や事業実施主体と住民等との信頼関係の構築の点より、ファシリテーターは外部の専門家に任せて事業実施主体も話し合いの輪の中に入ることが良いのではないかと考えている。

また、「イマジン・ヨコハマ」の事例では、ワールド・カフェがきっかけとなり、それに関連したワールド・カフェが市民の間で自主発生的に行われたり、参加者が各自の生活や職場等で積極的に導入したりなどの広がりがみられているが、このようなことが発生したという点からも、この事例のワールド・カフェ成功を裏打ちしていると思われる。

ワールド・カフェの実行に際しては「初対面同士のグループで話し合いが積極的に行われるのであろうか」という疑問・不安を持たれることも多いかもしれない。しかし、ヒアリングを行った事例ではいずれも良好かつ活発な意見交換が行われたようであり、この点に関してはさほど心配する必要はなさそうである。特に「イマジン・ヨコハマ」の事例では、実施主体側がワールド・カフェの話し合いの場に加わることにより、実際にそのことを体験して実証されている。

ワールド・カフェの課題として、現時点で考えられる主要なものとしては、以下の三点が挙げられる。

第一点として、「ワールド・カフェのファシリテーションが出来る人材の育成」である。

ワールド・カフェにおける話し合いがスムーズに進行するためには、良質の「問い」を創出する能力、参加者への話し合いのルールを理解促進と遵守のための導き方、ルールから逸脱してしまった参加者への対処の仕方、等が重要である。特にルールから逸脱してしまった参加者、いわゆる「場を乱す」参加者への対応には高度な技術が要求される。そのため、ファシリテーター養成用のしっかりとした研修プログラムの開発とその実施により、質の高いワールド・カフェを実施できる人材を育成していくことが今後の課題のひとつである。

第二点として、「ステークホルダーの利害・関心の把握」への活用が挙げられる。

参加者全員から数多くの意見が聴取できるというワールド・カフェの特性を生かすひとつの可能性として適応出来ると推察されるが、現時点ではその目的のために行われた事例がなく、今後の研究課題のひとつと言える。

第三点として「ワールド・カフェ実施後における、ワールド・カフェでの話し合い内容の生かし方の工

夫」が挙げられる。

数多くの意見が聴取できるということは、逆にこれらの意見をどのような方向性を持ってどのように生かしていくのか、またそれを誰がどのように決めていくのか、ということが問題となる。本論分で紹介した事例では、後日意見集約のための会合を開くなどの工夫をしているが、この点についても検討を進めていく必要がある。

5. おわりに

PIの目的は「合意形成」を最終目的にしているのではなく、広く意見を表明できる機会が提供され、関係者間で意見が違ふことや、なぜ意見が異なるかを理解できることが核心である、と指摘されている⁴⁾。

結論を求めない話し合いを目的としたワールド・カフェの理念は、そのようなPIとの相性が良いといえるであろう。特に、PIの初期の場面ではワールド・カフェが参加者相互の信頼感醸成に大きく寄与することが期待されるため、積極的な導入が望まれる。

今後ワールド・カフェの認知が広まり、多くの導入事例が出現することを期待すると同時に、筆者の関係する業務においても適応可能性がある場面では積極的に導入し、役立てていきたいと考えている。

謝辞：本研究におきましてヒアリングにご協力頂きました横浜市都市経営局政策課（現横浜市政策局政策課）、国土交通省都市・地域整備局公園緑地・景観課及び関係者の皆様に深謝いたします。

参考文献

- 1) J. ブラウン, D. アイザックス（香取一昭, 川口大輔訳）：ワールド・カフェ, ヒューマンバリュー, 2007.
- 2) 香取一昭, 大川恒：ワールド・カフェをやろう!, 日本経済新聞社, 2009.
- 3) http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/seisaku/brand/executive_summary03_worldCafe.html
- 4) 屋井鉄雄：社会資本設備の合意形成に向けて, 土木学会, 2004.